

「はた足」を使っての水泳指導

—教育技術の確立のために—

浅見 裕*

(1986年1月17日受理)

Swimming Instruction using a Method called "Hata-ashi":

Slow and Silent Up and Down Movement of the Legs

「教育技術の法則化運動」では、教師の力量を高めることを目的としており、共鳴する教師も多い。体育科教育学においても、教育技術の確立は重要な課題である。

学部教育において、小学校教員養成課程学生対象の授業を行っている筆者としても、体育授業について学生たちの指導力養成を果たさねばならないが、体育実技については苦手・嫌いの学生も多く存在しており、指導力養成には非常な努力を強いられている。水泳の授業では、できないと思われている「バタフライ」を取り上げ、誰もが泳げるようになることを目指して指導している。

この実践を踏まえて、誰もが教えることのできるバタフライの指導方法の確立を目的として、指導の順序と指導者の発言内容を示した。特に「バタ足」ではなく、「旗(はた)足」という新造語を使って、無駄な力を使わない泳ぎの習得を目指しての指導方法を提言した。この指導方法を使っても、直ちに誰もがどの子どもをも泳がせるのは難しい。学習者一人ひとりに対応できるかどうかという教師の指導力によって左右されるのである。

体育についても、「教育技術の法則化運動」は未だ、一人ひとりの子どもに対応できるような教育技術を数多く確立しているとは言えない。現在までの「教育技術の法則化運動」には、「つまずきの原因を見抜く力量の必要性の検討が不足」・「すぐに役立つという表現が曖昧」・「定石についての考え方に異論あり」などの問題点があることを述べた。今後これらの問題について検討を深めることは教員養成の仕事にも関わり、筆者の今後の課題でもある。

* 岩手大学教育学部保健体育科

I はじめに

現在、教師の力量を高めようと「教育技術の法則化運動」が提唱され、注目されている。多くの教師たちが「どのように教えるのか」という具体的な指導方法を求めていることの現れでもあろう。体育科教育学においても、教師の指導力を高めるために、子どもたちが「できる」・「伸びる」ような指導技術を確立することは大きな課題である。

この論文では、水泳の泳法の中で、体力が必要なので初心者向きではないと思われる「バタフライ」を取り上げる。そして「旗（はた）足」という新造語を用いた筆者の水泳指導の実践を基に、初心者でも無駄な力を使わずに楽に泳げるようにする指導方法を提言する。

II 「バタフライ」泳法について

(1) なぜバタフライを取り上げたか

向山洋一氏は著書「斉藤喜博を追って」(昌平社、1979年4月)の中で、

『ぼくは担任をすると、一週間以内にとび箱をすることにしている。誰でも可能性があることを話してあげ、その証明としてとび箱がとべない子をとばせてみせてあげるのだ。教師がいくら可能性のあることを言っても、子どもは半信半疑である。しかし目の前で、とび箱のとべない子をとばせたあとは違う。初めてとんだ子もそれを見ていた子も、一様に可能性を信じるようになるのである。(p.6)』

と述べているが、可能性を信じさせるという目的であれば、水泳でも泳げるはずがないと思っている泳法を簡単に泳がすことで、信じさせることは可能である。筆者が指導する対象は大学生たちだが、彼らにバタフライが泳げるようになることを体験させるということでも、向山氏が小学生の跳び箱について述べていることと同様の意味を持つ

ことになる。

多くの子どもたち(教師でも)が泳げるはずはないと思こんでいる泳ぎ方の一つであろう「バタフライ」は競泳種目の一つである。しかし、競技・競争に結びつけなければ、誰にでも習得が可能であり、誰にでも指導が可能と考える。なぜなら、導入部分は学校体育研究同志会の提唱した「ドル平泳法」と同じであり、手のかき・足のけりはそれぞれ左右同時の動きであり、かえる足の難しさもなく、神経支配上からも容易¹⁾である。学校体育研究同志会は初心者指導の段階であるドル平泳法から近代泳法への発展過程はドル平泳法→バタフライ→クロール→平泳ぎ→背泳²⁾の段階を考えていた。

指導者が水泳の技術の発展段階を競技に連結させるかどうかによって、指導方法に新しいものが生まれるか選手養成方式の練習を踏襲するままになるかが決まってくると考える。

(2) 「はた足」とは何か

「ドル平泳法」は、先ず最初に呼吸の指導から入る。これは、初心者指導に有効であり多くの実践例がある。学部教育の水泳実習においても「ドル平泳法」を取り入れている。教員養成の段階ではこのような手立てを講じている。(小学校の水泳指導の実態はどうなっているのかは定かではない。)

筆者の見聞したところでは、小学校の授業においてよく行われてはいるが、子どもたちからは人気の無い練習方法の一つに、「バタ足」練習がある。この練習では子どもたちは必死の形相で頑張りながら臥し浮きのまま水しぶきをあげている。スイミング・スクールの選手養成コースならともかく、特に小学校の水泳の授業において子どもに楽しく授業に取り組みせようとするのであれば、一生懸命のバタ足練習を必ずやらせるということ

1) 永井博他著「スタートスイミング」(青木書店、1981年6月) p.54。

2) 学校体育研究同志会編「水泳の指導」(ベースボールマガジン社、1972年7月) p.60, p.127。

は理不尽であるとすら思う。

筆者は、水泳の指導では「力を使わず楽に泳げる」ようにすることが大切だと考えている。それは水しぶきを上げないで泳ぐクロールの練習に取り組ませた時、一受講生が呟いた「こんな水泳なら楽しいな」という声を耳にし、それまでの「バタ足」指導を反省した結果からである。従って、筆者の指導においては、バタ足とは言わずに「はたあし」と言って、推進力を得るための動作ではなく、浮力を得る（浮いている状態を維持する）ためだけの目的で足をゆっくり上下させる動作を行わせ、無駄な力を使わないで泳がせる方法を探っている。

(3) 筆者の授業にて

昭和60年度実施の本学プールでの水泳実習で、筆者は異質グループからなる班員（男女合計48人、いずれも小学校教員養成課程在籍の2年次学生）を受け持った。彼等のうち、バタフライもどきであれば、初日の45分間の練習で40人が10m以上泳げるようになり、3日間の実習の最後の日には、それまで延べ40分（1回に10分を4回）のバタフライの練習で全員が呼吸ができて15mを超えてできるようになった。15m以上泳げない者は、まだリキみや極端な動作（膝を深く折ってキックを行い、顔をあげるためにそりかえってしまい、沈みやすすまぬ。）のために破綻をきたし、立ってしまうのである。キックは水面下でリラックスして行って初めて効果があるのだが、今まで必死の形相で行うバタ足練習に染まってきた学生にとって、3日間ではその習慣は消し切れないとも言える。

競技種目としてのバタフライには「いかにスピードを上げるか」という絶対的な課題があり、その課題を満たすような指導は競泳の専門家以外には難しいと思う。しかし、向山氏は体操競技の専

門家ではなく、跳び箱の跳ばせ方³⁾についても競技会用のものを目指しているのではない。水泳指導においても、競技の専門家ではなく、教育の専門家（＝一般の教師）の中から「楽しい水泳」を可能とするために、教育実践を踏まえた指導方法が数多く生まれてくるべきである。

以下、次章のⅢにおいては、競争を目的としない「バタフライ」の指導における指導の順序と具体的な指導者の発言を明らかにし、水泳指導の一方法を提言する。但し、筆者の指導の対象は大学生であり、「足の筋肉・骨が重い」という特徴をもった者に対する指導の実践から生まれたものである。

Ⅲ 指導内容について

(1) 実験により浮き易い姿勢について認識を深める 1分

「お皿を使って実験します。」

深いお皿を伏せた状態にして水中で手を離すと、ゆらゆら揺れながらゆっくり下降する。逆に上向きで離すと、スーと早く下降する。（注意：これは揺れている水の中で実験してもうまくいかない。）浮力の違いを認識させ、伏せたお皿と同じ姿勢になることの意味を悟らせる。

(2) ドル平泳法の導入 18分

陸上での息の吐き出し方の練習から始まる学校体育研究同志会のドル平泳法の習得順序に従って、準備運動・シャワーの使用を含め臥し浮きができるところまですすめる。（本論の中心ではないので、その具体的方法は省略する。）

(3) 臥し浮きの練習 2分

3) 向山洋一著「跳び箱は誰でも跳ばせられる」（明治図書、1982年2月）に詳しく掲載されているが、そこでは「腕立て開脚跳び」の跳ばせ方が述べられている。この跳び方は小学校体育の教材の一つであり、現在の競技会で演技されることは全くない。

水へ入って(臍位の深さが望ましい)両足を前後に構え、前の足で水底を蹴って、臥し浮きをする。

「手首は幽霊と同じにする。」

この指示は昭和50年頃から自分の言葉として使っていたが、「お化け」と言って他者も使っている⁴⁾。

「視線は足の指先に」

これでお皿を伏せたのと同じようになるし、「幽霊・お化け」になることでもリキミを取れるはずである。恐怖心をまだ抱いている者にとっては、この部分からつまづきが始まる。恐怖心の取り除き方については、もっと前の段階(学年)から対応すべきことであり、本論ではふれない。

「このままじっとしていると、足の方から沈んでくることを確認してください。」

足の指先を見ているので確認できるはずである。特に大学生の男子の場合は早く沈んで足先が水底につく。

(4) いよいよ「旗足」はたあし」の登場 3分

「ゆっくりと足を上下にゆらし続けて下さい。進まなくていいのです。」

(「進んじゃダメですよ。」「しぶきは上げません。上げると疲れちゃいますよ。」「浮き続けられればいいですよ。」等各人への注意の言葉。)

「これはバタ足ではなく、はたあしと言います。」

もし、教師が示範することがあれば、鯉のぼりの吹き流しが、風にゆっくりと動かされているようなつもりか、大きな旗が優しい風に少し動いているようなイメージで行うか、左右それぞれの足がともに1回キックするのに1秒かける程度に動き続けていると、足は沈まず、進みもせず、その場で浮かび続けていることが可能になる。しかし、進んでしまう学習者を目くじらたてて直すこともない。本人にとって楽に上下に動かすことができなければいいのであるから。それでも水しぶきは上げさせてはいけない。

「いいかげんにやって下さい。一生懸命はダメ。」

体のリキミを生じさせないためのオーバーな表現として述べる。日本の教師は一生懸命というのが好きなのだが、水泳では楽に泳ぐためには体のリキミは無用の長物であり、一生懸命というのと却って弊害が生ずることもある。(学生はこれ聞いて「ホッ」とするようである。)

「長距離選手のクロールでは、バタ足の推進力は前進スピードの2割分相当です。」

初心者の場合は、わずか2割のためのバタ足をするだけでもリキんでしまって全ての力を使い切って疲れ果ててしまうし、体がゆれてバランスを崩しやすいという弊害すら生ずる。

「楽に泳ぐためには足で苦勞するのはやめましょう。」

その分、手のかきをしっかり身につけさせれば十分進みもするし、楽である。

4) 注2) p.49。

〔この後、クロールの導入に進むこともできるが、筆者は以下のように続けている。〕

(5) 両足はた足の練習 4分

「両足同時に上下する、はた足をやってみましょう。」

進んでもダメ、水しぶきがあがってもダメであることは同じ。視線も同じ足先を見ている。

(6) はた足によるドル平泳法（ドル平もどき）の練習 7分

両足同時のはた足をしながら、水を腕で斜め下に押しながら顔をあげて息を強く吐き出す。

「さっき（その2）の、呼吸の方法をはた足を使いながらやりましょう。」

「口が出たら、パァッと息を強く吐く。」

すると、顔を上げて息をした後は、かなり深くまで体全体が水中に沈んでいく。（水底近くまで沈む者もある。）沈んでいく時に、意識的に首を前屈させて視線を足先へ戻す。

「腕は水の中で下から前に戻します。」

「沈んだ後は、背中の一部が空気に触れる迄ゆっくりと何回もはた足を繰り返します。」

「この泳法を、ドル平もどきと言います。」

ドル平泳法では2回のキックを行うとあるが、何回でもよいのであり、大体5回位でどの人も背中水面に出てくる。

この回数を少しずつ減らして、2回のキックで水面に背中が出るようになるまで練習させる。これで「ドル平泳法」の完成となるが、この練習は「(7) バタフライもどきの練習」の後に回してもよい。徐々に、水中での足の甲による水を下へ押す力が強くなっていくようにする。

「サッカーのボールを両足で蹴って、プールの底にぶつけるつもりでやろう。」

急ピッチでは絶対に行かせない。間（ま）をとって、1回ごとのキックを確実にさせることにより。

(7) バタフライもどきの練習 5分

ドル平泳法ができるようになったら、次に「バタフライもどき」の練習に移る。ただし、ドル平もどきの段階でも移行してもよい。個人差があるので、7分という時間内では2回のキックで浮かんでこない者が生ずることがある。

立ったまま、腕を全部かく練習（10回）

「せっかくだから、腕を全部回して水をかきます。」

この前の段階では「腕は水の中で、下から前に」戻っていたので、推進力にはマイナスの働きになっていた。ここからは推進力を得るための有効な方法として、腕の使い方の練習に入ることになる。

水をかき切ったところで止めず、回して前に戻すまでを一連の動作で行う。

「幽霊から、幽霊まで続けて回す。」

「幽霊は2秒間静止。」

指導者がゆっくりリズムを数える。

「1・2・③」ザブーン「1・2・③」ザブーン

③のところで水をかく。(10回)

ただし、筋力には個人差が大きいので「肘の角度」・「水をかく深さ」などについては言及しない。全部回せれば良いのであり、一人ひとりの腕の使い方は自由でよい。むしろ、「腕は伸ばしたままでかければそれでよい」と言っておいた方が、脳から腕へ多くの命令を出さずに済む。伸ばしたままと言っても、肘は自然に曲がっている者がほとんどであるし、水からの抜き上げから前方へ伸ばして腕を入水させる動きが大きくなる利点の方が目につく。

浮きながらの練習を行うために「ドル平もどき」に戻す。

「ドル平もどき」を繰り返す内に、よく浮いてきて余裕のある時に、1回全部水をかく。

「背中が出たら、腕を全部回す。」

「はた足は何回使ってもよい。」

次には、ドル平用とバタフライ用の腕の使い方の回数を指定する。

「ドル平の腕を3回(もしくは2回)に1回全部回す。はた足は何回でも入れてよい。」

推進力がついてきた時には手の指先を下向き(幽霊・お化け)のままだと、はた足を繰り返しても浮上してこない。

「深く沈んだ後は、手首から先だけ上向きにする。」

「バタフライもどき」の完成。

「背中が出るまでは足を続け、腕を全部かいて進もう。」

「これをバタフライもどきと言います。」

はた足を続けることを指示していることから、腕をかいた後、前方へ伸ばして静止している状態を自然に保持していることになり、「グライド」⁵⁾へつなげる動きを身につけるといふ余録もある。

背中が水面上に出ていると良く浮いている状態から、「グーッ」と腕で水をかく時に顔をタイミングよく起こさなければならないという問題が生ずる。「タイミングよく起こす」という脳からの命令を、腕をかきながらの忙しい時期に発しても初心者には成功はおぼつかない。そこで、はた足を繰り返して背中が出るまでは足先を見ているが、背中が出たら視線を前方に移し、水面下から手の指の先の水面を水中から見上げる。見上げると水面がキラキラ光っているのがわかる。

「キラキラを見てから、グーッと全部水をかこう。」

結果として見上げる時に顔がやや起きており、顔を水面上に出す準備をここでを行い、忙しい時期によりタイミングで口を水面上に出し、呼吸が容易にできるのである。

5) 競泳のバタフライを見ていて、腕が風車のようにいつも動いて見える人は、認識を変える必要がある。腕は入水の後、直ぐにかくのではなく更に前方に伸ばし(これをグライドという)、水のかきを少しでも多量とする時期がある。初心者に対しては、前方に伸ばしたままの時期があるのだと覚えさせる程度でもよい。

「バタフライもどき」とは、2ビートのキックにこだわらず、臥し浮きから前方に伸ばしている腕を、前から大腿まで全部かききって、逆飛び込みの要領で再び水中に突っ込んだ後、背中が水面に出てくるまで何回でもキックしてよい方法のことである。この何回ものキックをしている間は、腕は前に伸ばしたままの幽霊・お化けの要領で力を抜いているが、指先は上向きにして静止させていることがポイントである。

(8) 1ストローク・2キックのバタフライ

「腕のかき1回に、キックは2回をやってみよう。」

腕のかきがしっかりしてくると、はた足がバタ足の(両足一緒のドルフィンキック)になる。「しっかり」の意味は、グーッとかく部分と力を抜いたグライドの動きが使い分けられるようになるということである。腕に強弱のリズムが生ずると、自然に足にも影響を与えるようである。従って、「足をしっかりキックせよ。」と言わずとも、キックの回数を指定(多→少そして2回へ)していくことだけでも十分ドルフィンキックらしきものになり、バタフライに近づけるようになる。

「バタフライもどき」のままでも終わっても良いし、「バタフライ」まで進んでもよい。個人差に応じて指導すればよい。

このように両足キックの回数制限を取り払うと、非力な女子学生でも「バタフライもどき」なら容易に習得できるし、男子よりも肩の柔軟性に富む女子の方が「バタフライ」を習得しやすいこともあった。男子は競泳の「バタフライ」をイメージ化しやすく、リキんでしまい苦勞することが多いが、両足はた足を使っての「バタフライもどき」からの「バタフライ」の習得の方が、ドルフィン・キックの部分練習から入るよりはるかに有効であ

った。

IV バタフライ導入におけるコツ

- A 競泳のイメージを捨て、ゆっくり行わせる。
- B 背中の一部が水面に出るまでのんびり「はた足」を繰り返す。
- C 腕をかいた後、脱力したグライドの状態をつくる。
- D 呼吸は、ドル平泳法によって身につけさせる。

以上のコツ・ドル平泳法の身につけ方についても、教師としてはそれぞれ指導の方法を持つていなければならない。

示範については、一個所を除いてほとんど言及しなかったが、跳べなくとも跳び箱を跳ばせられるなら、泳げなくとも泳がすことができなくてはならないという理由からである。

V 指導方法の実施に伴う問題点

他者が同じ言葉を使っても筆者が教えた時と同様の効果が得られない場合がある。そこには様々な問題が含まれているが、ここでは「全ての子どもたちに適切な一つの方法(万能的方法)はあり得ない」という筆者の考えについて、以下に述べる。

東洋氏は、著書『子どもにものを教えること』の中で、ATIと呼ばれる現象を、「相手の能力適性によって、最適な教え方が違ってくる」⁶⁾と簡明化して紹介しているが、実際の指導ではこのATIを踏まえていなければならないのである。

教師がいくら楽に泳げることを可能にする一つの指導方法を知ったとしても、子どもたち(学習者)一人ひとりが抱える問題点は別々であり、それぞれの子どもに最も適切な指導の方法は、本来

6) 東洋著「子どもにものを教えること」(岩波書店, 1984年11月) p.20.

はその人数分だけ別々にあると考えるべきである。実際の指導において、筆者が記述した（ワクで囲んだ）指導の言語を活用するとしても、それを学習者たちがどう受け取り、どのようにイメージ化して行動（運動）するかについては、人によって違うことがあるという認識は持っているのが当然のことでもある。

子どもたち一人ひとりをしっかり見つめることが教師に要請されているが、見つめれば見つめる程、一人ひとりとは違うのである。万人に効く万能的指導方法はあり得ない。向山氏の跳び箱運動における跳ばせ方（A・B方式）も、跳べない子どもを指導する際の一方法である。従って、ある条件の学習者に対して「誰にでも教えることができる」方法があるとは言えても、「どんな学習者にも合う」方法はないと言える。

東氏も先の著書の中で、

『ATIということを知ると、だれでも考えるのは、どういうタイプの子どもにはどういう教え方をすべきかを研究しなければならないということです。ところがこれはそう簡単にはいきません。』⁷⁾

『ATIといっても、こういうタイプの子どもはこう教えるのが最適だというように、処方箋をつくることができるわけではありません。（中略）つまり子どものタイプによって、教え方が異なるべきだだけでなく、子どものタイプも、場面の状況も、子どもの意図も教え手の意図も、また両者の関係も全部ひっくりめた、大きな「場合」によって、どう教えるべきかが異なってくるわけです。』⁸⁾

と述べている。万人に効く万能的方法の存在については、否定されているのである。

「はた足」を使っての水泳指導も、実際には全ての学習者に有効とはならず、もし、学習者の条件を問わず全員一律に指導したとすれば、この方法でも泳げない者が生じてしまうのである。

従って、楽な泳ぎを習得させるのに適した方法であり、バタフライといえども誰でも指導可能であるとの確信はあるが、厳密に言えば、ここで提言した方法は「臥し浮きができる程度以上の者を対象にしてバタフライを指導する場合、誰でも習得でき、誰でも泳がせることができる」方法なのであり、力強さ・スピードを要求しての指導方法よりも、習得がより容易であるということなのである。

VI 「教育技術の法則化運動」についての検討

この論文は、「教育技術の法則化運動」（以下、「法則化運動」と記す）に共鳴して書いたものである。しかし、多くの指導方法を集めている「法則化運動」ではあるが問題点もある。新任教師・若い教師とは限らないが、力量（指導力）がないと思われる教師たちが「法則化運動」から学んだと言っても、子どもたちを指導した時に「落ちこぼし」はしないかどうかを考えていくと問題がある。以下にその問題点を上げ、今後の検討課題を明確にする。

(1) 原因を見抜けるか

東氏が述べたATIに関する文章の中の「子どものタイプによって、教え方が異なるべき」という個所だけを見た場合でも、子どものタイプを正確に把握できることが前提のはずである。

「法則化運動」の方針の中に、基本理念として4項目が上がっており、その④は「多くの技術から、自分の学級に適した方法を選択するのは教師自身である。（主体性の原則）」⁹⁾となっている。

「学級に適した方法」では、「なるべく多数に一応あてはまるようなやり方で教え」¹⁰⁾ることにならざるを得なくなる。学級の中には、様々な子ども

7) 同上書 p.25。

8) 同上書 p.46。

9) 向山洋一編集代表「教育技術の法則化8」（明治図書、1985年7月）p.113。

10) 注6) p. 46。

もたちが混在しているのであり、極端に言えば子どものタイプは子どもの数だけ違うのである。この「子どものタイプ」を正確に把握することは、教師にそれなりの力量が備わっていなければ難しいことである。

クラスの中でできない子どもを診断し、できない原因（100人いれば100通り違う）を正確に把握し、できるための最適な方法で手当てをすることは、担任にしかできないことではある。しかし、その担任自身に、できない原因を見抜けるような力量がない場合、どんなに「法則化運動」による出版物（例えばシリーズ「教育技術の法則化」がある）¹¹⁾から得た指導方法を用いたとしても、適用の判断を誤った場合には効果は現れないはずである。シリーズ「教育技術の法則化」においては、教師自身に合う方法を選択できる¹²⁾ようにしているのであり、子どもの実態（タイプ）に合う方法の選択についてまでは触れていない。

クラスの子どもたちの中にできない子どもが出現した時、できない原因が見抜けるという力量は、教師にとって欠くべからざる指導力であろう。

向山氏は、教師の技量を上げるための「方法」として三つのことを述べている。

第一に教育技術（定跡・定石）を学ぶこと

第二には教育技術を使ってみること

第三は自分の実践を「発問」「指示」「留意事項」という観点から文章化すること¹³⁾

この中に、できない原因を見抜く技量を上げるための「方法」が入っていれば良いのだが、未だ体育についてはシリーズ「教育技術の法則化」にも入っていない。今後の「法則化運動」の課題でもあるし、教師一人ひとりの課題でもある。

「法則化運動」から学ぼうとする側の教師にとっても、与えられた方法にのみ頼ってはいられないのである。向山氏は、「すぐれた教育の技術を学ぶのは、「うまい方法」を身につけるためだけが目的ではない」¹⁴⁾と記してもいる。

教師は、つまずきの原因にマッチした適切な方法を選択できる力量こそ持つべきである。もし、持っていないければ、数多くの指導方法を集めて抱えていたとしても、限られた時間の中だけでは、依然として「落ちこぼし」続けることになる。但し、指導の効率化を無視して何時間でも指導を続けられるのであれば、原因が不明でも教師自身の知っている指導方法を片っ端から実施することで、やがては学習者は「できる」ようにはなるかもしれない。現実の学校教育現場ではこのような対応は窮めて難しいことであろう。

向山氏は「いろいろな子どもがいますから、いろいろな教育技術が必要です」¹⁵⁾と述べている。だからといって、一つひとつの適切な方法¹⁶⁾を知識として数多く集めただけでは授業時間の中で全ての子どもたちを泳がす（できる）ことはできないのである。

11) 向山洋一氏を編集代表として、第I期全12巻が1985年7月に出版されている。注9)の著書はその中の一巻でもある。

12) 向山氏は、注10) p.6において「たとえば『逆あがりをできるようにさせる方法は、A型、B型、C型とあります。ご自分にあった方法をお選び下さい』というのが本シリーズのねらいです。この本は多くの方法を示してあります。選択されるのはあなたご自身です。」と述べている。

13) 向山洋一著「授業の腕をあげる法則」（明治図書、1985年7月）p.159。

14) 同上書 p.172。

15) 注9) p.7。

16) 適切な方法と言っても、その適切な程度には差がある。向山氏が公表した跳び箱運動の腕立て開脚跳びにおいては、単にできるための方法を明確にしたということだけではない。その方法によれば、できない原因が多様であっても効果の程が変わらないという、できない子どもに対しては万能的性格を持った方法であり、このような方法は希有のことであろう。

(2) 「すぐに役立つ」のか

シリーズ「教育技術の法則化」には、「すぐに役立つ教育の技術と方法」¹⁷⁾を載せているとなっている。ところが「逆上がりは誰でもできる」(根本正雄氏の著)の項¹⁸⁾を見ると、8日かかって成功しているし、出来ない子も1名残っている。「補助台を用いることは万能ではない。(中略)今回の実験に限らず、この方式を用いた多くの実践において常にできない者を残しているし、なかには五十四日間という驚くべき日数を費やして達成させたという報告もある」¹⁹⁾のであれば、「すぐに役立つ」こととは何のことを言っているのか不明になる。

根本氏は、飯田勝己氏の実践²⁰⁾である「さか上がりのできる子の指導方法」を追試し、そこでは大切な配慮事項として三点を加えた、と向山氏は記している。

- 一 練習は毎日やること。
- 二 教師がついていること。
- 三 教師はたえずはげまし続けること。²¹⁾

この三点からすると、「すぐに役立つ」のは、教師のあり方を学ぶのに役立つのであり、すぐに逆上がりができるようになるのに役立つのではない。それでも、「ほぼ全員を出来るようにさせることが可能」²²⁾(下線付けは筆者)なのである。先に述べたように、本来「全ての子どもができる逆上がりのただ一つの指導法」はあり得ないのである。

従って、シリーズ「教育技術の法則化」の謳い文句である「すぐに役立つ」は、体育のどの分野・種目についても有効とは言えない。「若い先生方、

忙しい女の先生方のために読んですぐに役立つすぐれた技術」²³⁾との表現は、誤解を生じやすい。

(3) 定跡・定石を学ぶ時期

先に、向山氏は教師の技量を上げるための「方法」として、「第一に教育技術(定跡・定石)を学ぶこと」と述べていると紹介した。その著書では引き続き、定跡(定石)を学ぶ必要性について、次のように述べている。

『だが、いくつかの定跡(定石)を知って、その場に応じて使い分けられるようになるためには時間がかかる。やはり、それぞれの方法について経験を重ねることが大切だからだ。経験を重ねるとその場に合った選択ができるようになる。』

以上をまとめてみる。

- 一 たった一つの定跡(定石)を知ってやってみる。
- 二 同じようないくつかの定跡(定石)を覚える。
- 三 具体的な場面でいくつかの定跡(定石)から一つを選択しやってみる。
- 四 このような経験を重ねて、使いこなせる定跡(定石)をふやしていく。

このように定跡をまず学ぶということが必要になる。』²⁴⁾

上記の四つの項目のうち、「四」はそれまでの記述からすると「定跡を使い分けられるようになるためには時間がかかる。(または、経験を重ねなければその場に合った選択はできない)」となるのではないだろうか。経験を重ねなければ使いこなせないのであれば、新任教師にとっては実際には「すぐに役立つ」という矛盾が生じてくる。時間のない教師・新任の教師がとびつきたくなるような謳い文句である「すぐに役立つ」には限度があることを弁えていなければならない。

17) 注9) p.5。

18) 同上書 pp.9~12。

19) 高橋健夫他著「逆上がりの指導●その3—処方プログラムとその効果」(『体育科教育』第33巻第13号、1985年12月) p.69。

20) 注13) pp.207~210。

21) 同上書 p.211, p.214。この三点は、シリーズ「教育技術の法則化8」には掲載されていない。

22) 注13) p.214。

23) 注9) p.8。

24) 注13) pp.162~163。

囲碁の名人の趙治勲氏は定石について次のように述べている。少々長い引用になるが、定石についてプロ中のプロが言っていることなので紹介する。

『大竹先生が定石について書いていました。

初級者、中級者で、強くなりたい一心から定石を一ページ一ページおぼえていって人がいるが、あれはほとんど意味がない。定石を三十おぼえても五十おぼえても、その人の力がつくわけでは決してない。勉強のやり方が逆である。戦いの力、碁全体の力量がついてはじめて、定石に入るべきである。〔向山氏の「定跡をまず学ぶということが必要」という論とは正反対・引用者〕(中略)

大竹さんは、九九パーセント定石不要論者です。私の感想をいわせてもらえば、まったく大賛成です。大竹さんの考えに、付け加えることは何もありません。(中略)

アマチュアでもアマ四強といわれる人たちや県代表クラスの人たちなら、定石大いにけっこう。大いにおぼえるべし、です。

というのは、この人たちは、ちょっと手順を見ただけで、その意味を理解できるからです。表に出てきた手順の意味と、裏に隠された変化の意味を理解できる人〔新任教師には無理なことであろう・引用者〕が、大いに定石を研究すればいい。(中略)

力のない人は定石に入るまえに、石の戦いの基本をまずマスターすべきでしょう。戦いの基本が積み重なることによって、結果として定石にたどりつきます。何も知らないところにいきなり提示される定石は、絵に画いた餅にすぎないでしょう。』²⁵⁾

向山氏の著書「授業の腕をあげる法則」では、「将棋や囲碁が強くなるためには定跡(定石)を学ばなくてはならない。」(160ページ)とあり、さらに「しかし、初段程度の技量になるためには、重要な定跡(定石)は勉強しなくてはならない。これは、いかなる「けいこごと」「習いごと」にも共通している。」(161ページ)とも述べている。上記の趙治勲氏の引用文とは矛盾している。

剣道では、基本動作の重要性は強く言われるが、定石という考え方はあまり聞いたことがない(筆

者は剣道7段)。従って、いかなる「けいこごと」「習いごと」にも共通しているとは言えない。

それはそれとしても、定石は磨かれた石であり、価値が判る人が使ってこそ光るものであろう。初心者(新任教師)ほど、定石だからという思いこみは強くなるのが一般的であるし、使い方が硬直してくるものであり、却って墓穴を掘る結果になり兼ねない。こうなると新任教師に定石だからといってやたらと推薦することの弊害は無視できない。

V まとめ

「教育技術の法則化運動」に共感を覚え、学部教育における授業でも、受講生たちにできるようにするための指導方法を考えさせている。水泳指導については、実際にバタフライができるようにすることで、可能性を信じさせようとした。

ここでは、バタフライの指導方法をまとめ、臥し浮きができる者なら誰でも泳げ、そして誰でも教えることができる一方法を提言した。この方法は、数年来の筆者の指導において有効なものであったが、他者の指導でも実際に有効であるかは、追試される方々の「腕前」に負うところが大きい。

「法則化運動」は力量不足の教師たちの腕前を上げることを目指していると受け取れるが、未だ体育については「法則化運動」自体にも解決すべき問題や整理しておくべき問題がある。子どもたち一人ひとりに対応できる教師の指導力を高めることについての検討が不十分であるし、「すぐに役立つ」とする方法についても学びとろうとする教師が誤解しそうな面があるからである。また、「定跡・定石」についての提唱者(向山氏)の考え方にも疑問がある。

これらの問題について検討を深めることは教員養成の仕事にも関連があり、体育科教育学に関わ

25) 趙治勲著「だから勝つのだ!」(KKロングセラーズ、1985年9月) pp.76~78。